

企画展「井伊直興と永源寺南嶺慧詢」展示作品リスト

No	資料名称	員数	作成者	制作年	所蔵
彦根藩中興の祖 井伊家4代直興					
◎ 1	いいこうぎょうじょう 井伊侯行状	1冊		江戸時代中期	当館（彦根藩井伊家文書）
◎ 2	とくがわつなよしこくいんじょう 徳川綱吉黒印状	1通	徳川綱吉	元禄2年(1689)	当館（彦根藩井伊家文書）
3	いいなおおきがぞう 井伊直興画像	1幅		江戸時代中期	永源寺
4	い い け い ふ 井伊家系譜	1冊		弘化3年(1846)	当館（井伊家伝来典籍）
◎ 5	なかみかどてんのうくぜんあん 中御門天皇口宣案	1通	そのもとたか 園基香	正徳元年(1711)	当館（彦根藩井伊家文書）
6	おかきつけとうとめ 御書付等留	1冊		江戸時代中期	個人
◎ 7	ごはつとならびにふうぞく つきおしめしとめちよう 御法度并風俗二付御示留帳	1冊		江戸時代中期	当館（彦根藩井伊家文書）
◎ 8	さむらいじゅうゆいしよちよう 侍中由緒帳	全80冊 のうち2冊		元禄4年(1691) ～明治4年(1871)	当館（彦根藩井伊家文書）
9	い い ねんぶ 井伊年譜	1冊		江戸時代中期	当館（井伊家伝来典籍）
◎ 10	おおほらべんざいてんしどうきんきしんちよう 大洞弁財天祠堂金寄進帳	全68冊 のうち2冊		元禄8年(1695)	当館（彦根藩井伊家文書）
永源寺住持 南嶺慧詢					
11	なんれいえいじゆんちんそう 南嶺慧詢頂相	1幅	とさみつなり 画：土佐光成 賛：南嶺慧詢	元禄15年(1702)	松雲寺
◎ 12	しんどうながしげあて いいなおたかしよじょう 進藤長滋宛 井伊直孝書状	1通	井伊直孝	正保元年(1644)	永源寺（永源寺文書、栗東歴史民俗博物館保管）
◎ 13	えいげんじあて いいなおすみしよじょう 永源寺宛 井伊直澄書状	1通	井伊直澄	延宝3年(1675)	永源寺（永源寺文書、栗東歴史民俗博物館保管）
◎ 14	れいげんでんのうりんじ 霊元天皇綸旨	1通	ふじわらのあつふさ 藤原淳房	延宝3年(1675)	永源寺（永源寺文書、栗東歴史民俗博物館保管）
◎ 15	げんじょうにつけん いち 彦城日件 一	1冊		文政元年(1818)	永源寺（永源寺文書、栗東歴史民俗博物館保管）
16	なんれいえいじゆんいんしよ 南嶺慧詢印章	1顆	南嶺慧詢	江戸時代中期	松雲寺
17	ねんじゆ 念珠	1連		江戸時代中期	松雲寺
18	ほつす 払子	1握		江戸時代中期	松雲寺
19	くじょうけさ 九条袈裟	1領		江戸時代中期	松雲寺
20	ざく 座具	1枚		江戸時代中期	松雲寺
21	し え 紫衣	1領		江戸時代中期	松雲寺

企画展「井伊直興と永源寺南嶺慧詢」展示作品リスト

No	資料名称	員数	作成者	制作年	所蔵
22	やまうちけいずつし 山内家系図写	1舗		江戸時代後期	個人
23	えんまんこうしょうぜんじごらく 円満広照禅師語録	1冊		江戸時代後期	松雲寺
24	なんれいえいじゆんあてやまうちどうもんしよじょう 南嶺慧詢宛 山内道紋書状	1通	山内道紋	江戸時代前期	個人
井伊直興と南嶺慧詢の交流					
25	にしほりさいすけらあてなんれいえいじゆんしよじょう 西堀才介等宛 南嶺慧詢書状	1通	南嶺慧詢	貞享3年(1686)	松雲寺
26	しょううんじあてきたませいざえもんしよじょう 松雲寺宛 木俣清左衛門書状	1通	木俣清左衛門	元禄14年(1701)	松雲寺
27	しょううんじらいゆがきうつし 松雲寺来由書写	1通	松雲寺	宝暦7年(1757)	松雲寺
28	ちょうじゆいんさまかんけいしよぐへんとうしよしたがき 長寿院様関係諸具返答書下書	1通	松雲寺	文化元年(1804)	松雲寺
◎ 29	なんれいえいじゆんあていなおおきしよじょう 南嶺慧詢宛 井伊直興書状	全48通 のうち1通	井伊直興	元禄9年(1696)	当館（彦根藩井伊家文書）
30	いなおおきあてなんれいえいじゆんしよじょう 井伊直興宛 南嶺慧詢書状	1幅	南嶺慧詢	宝永2年(1705)か	松雲寺
◎ 31	なんれいえいじゆんあていなおおきしよじょう 南嶺慧詢宛 井伊直興書状	全45通 のうち1通	井伊直興	宝永3年(1706)	当館（彦根藩井伊家文書）
32	いなおおきがんもん 井伊直興願文	1通	井伊直興	宝永3年(1706)	松雲寺
33	ちょうじゆいでんらじゆとうくようきろくそうこう 長寿院殿等寿塔供養記録草稿	1冊		江戸中期	松雲寺
34	なんれいえいじゆんあていなおおきしよじょううつし 南嶺慧詢宛 井伊直興書状写	1通		江戸後期	松雲寺
35	なんれいえいじゆんぎょうじょう 南嶺慧詢行状	1冊	ぜんのうげんてい 全応玄提	享保9年(1724)	個人
36	しょううんじあてしどうまいしよもん 松雲寺宛 祠堂米証文	1通	ようあんじ 永安寺	享保19年(1734)	松雲寺
37	しょううんじがんしようつし 松雲寺願書写	1通	松雲寺住持	江戸後期	松雲寺
38	こうかくてんのうくぜんあん 光格天皇口宣案	1幅	ひろはしたねさだ 広橋胤定	寛政4年(1792)	松雲寺
39	なんれいえいじゆんゆいげ 南嶺慧詢遺偈	1幅	南嶺慧詢	正徳4年(1714)	松雲寺
◎ 40	えいげんじけいだいならびにじりょうえず 永源寺境内并寺領絵図	1舗	永源寺役者	慶応3年(1867)	永源寺（永源寺文書、栗東歴史民俗博物館保管）

※◎は国指定重要文化財

作品解説

作品No. 3 井伊直興画像 1幅

縦 69.3cm 横 44.6cm

江戸時代中期

永源寺蔵

右手に笏^{しやく}をとり、太刀^はを佩^{そくたい}いた東帯姿^{うんげんべり}で纏綿縁の上畳に座す井伊家4代直興(1656~1717)の姿を描いたもの。直興は、享保2年4月20日に62歳で亡くなり、遺言によって臨済宗永源寺派の本山永源寺へ埋葬されました。本作は、裏書から、直興の側室の一人である松源院(?~1741)が同寺へ奉納したことがわかります。これは、直興の死去に伴うものと考えられます。



作品No. 11 南嶺慧詢頂相 1幅

土佐光成筆

縦 105.2cm 横 51.1cm

元禄15年(1702)

松雲寺蔵

土佐派の絵師 土佐光成が描いた南嶺の像。頂相(禅宗の高僧を描いた肖像画)は、弟子の修行者が悟りを開いた証として師僧から授けられたり、開山忌の法要の際などに用いられたりするもので、本作は、松雲寺の開山忌法要の際に現在も使用されています。本作の上部には南嶺74歳の自賛^{じざん}があり、自身を無智無徳の禅僧とし、臨済宗の名刹 永源寺の住持を勤めた際に己の恥を知ったと表現するなど、賛には彼の謙虚な人柄がよく表れています。



作品No. 13 永源寺宛 井伊直澄書状 1通

重要文化財

縦 38.0cm 横 51.8cm

延宝3年(1675)

永源寺蔵 (永源寺文書、栗東歴史民俗博物館保管)

永源寺住持への常紫衣の勅許（代々の住持が紫衣を着用して参内することが許されること）を祝い、井伊家3代直澄が同寺へ宛てた書状。紫衣は、天皇が認めた高僧にのみ着用が許される特別な装束で、着用を許されることは、その僧侶や寺院の格式の高さを示しました。しかし、当時は幕府の法令により、紫衣の勅許には幕府による事前の許可が必要でした。そこで、永源寺の住持であった南嶺は、以前から自身を重んじた直澄を頼り、彼を介して4代将軍家綱から許しを得ることに成功しました。本書状からは、「目出度御満悦」と勅許を心から喜ぶ直澄の様子がうかがえます。直興が藩主となる以前から、南嶺と井伊家が深い間柄にあったことがわかる貴重な資料です。



作品No. 19 九条袈裟 1領

縦 139.9cm 横 340.5cm

江戸時代中期

松雲寺蔵

南嶺所用と伝わる、雲龍の紋様が施された袈裟。文化元年(1804)に松雲寺が所蔵する直興関係の諸品について記した資料（作品No. 28）を見ると、直興が南嶺に寄進した法衣類の中に「雲竜幼大衣」が確認でき、本作はこれに当たる可能性があります。



(拡大)

作品No. 31 ^{なんれい え じゅんあて い い なおおき しよじょう} 南嶺慧詢宛 井伊直興書状 1通

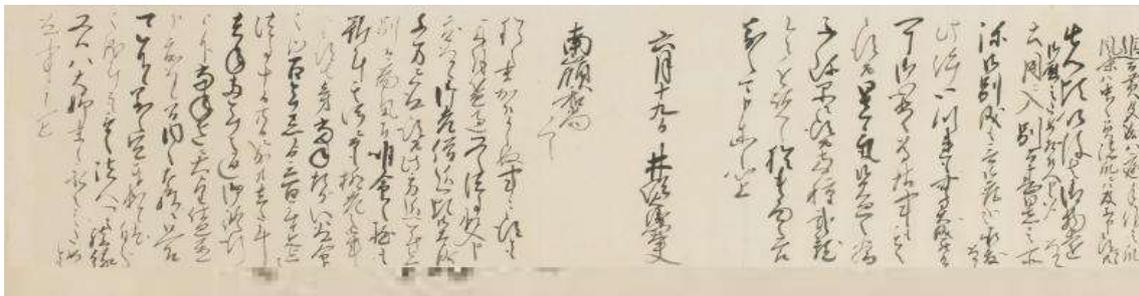
重要文化財

縦 15.9cm 横 61.2cm

宝永3年(1706)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

当館に彦根藩井伊家文書として伝来する、南嶺宛の直興の直筆書状93通のうち^{じきひつ}の1通。松雲寺の什物として保管されていたこれらの書状は、江戸時代後期に井伊家12代直亮^{なおあき}によって井伊家に取り入れられました。本書状には、直興(51歳)が南嶺(78歳)に自身三百年忌までの逆修法要(生前に行う追善法要)の実施を希望する旨が記されています。直興は、五十年忌まで・百年忌まで・三百年忌までと3回に分けて逆修法要の執行を彼に依頼し、宝永元年から同3年までの間に、これらの法要を松雲寺において行わせました。本書状にある3回目の法要を除き、直興は同寺に赴いてこれに参加しています。



作品No. 35 ^{なんれい え じゅんぎょうじょう} 南嶺慧詢行状 1冊

縦 27.0cm 横 20.0cm

享保9年(1724)

個人蔵

南嶺の筆頭弟子であった全心玄提^{ぜんのうげんてい}が記した南嶺の行状。南嶺の幼少期^{せいしゅき}の様子をはじめ、師僧一絲文守との修行、井伊家4代直興とのやりとりなど、南嶺の履歴を詳細に記しています。南嶺の履歴を記した資料は他にもありますが、本資料はそれに比して内容が豊富で、信憑性も高いと判断される点に特徴があります。とりわけ、南嶺が永源寺を離れて松雲寺に移り、直興との関係を深めていった時期については、南嶺の足跡を追える他の記録がほとんどなく、南嶺のことを知る上で基本となる資料です。

